

アジアからの言葉が、日本近代の精神を震撼させるとき、いったい何が起こるのか。この心の動揺、抑えられない動悸、心身を横断する情動はどこから来るのか。

竹内好の『魯迅』は、端々まで、このような問いに貫かれている。そして、このような存在の戦慄を、今なお伝えている。この作品は一九四三年に書かれた。出版はその翌年である。アジア太平洋戦争の、日本の中国侵略のさなかのことだ。竹内好は当時三〇代前半、少壮の中国文学者だった。およそ日本の外国文学研究者で、課題の選択において、研究が行われた時代の環境において、対象との、これほどぬきざしならない関係を、それもみずから望んで生きたケースはまれだろう。同時代の中国最大の知識人の足跡を、力の及ぶ限り緻密にたどる知的・倫理的燃焼の果てに残された濃密なテクスト。その意味で本書は、まちがいがなく、言葉の強い意味で記念碑的な書物である。

しかし、この本は「記念碑」であって「古典」ではない。なぜなら本書は、多くの実際の記念碑と同様、また魯迅の評論「忘却のための記念」と同じ意味で、また逆の意味で、殺戮の「記念碑」であり、傷だらけの「記念碑」でもあるからだ。そしてその傷は、単に過去に向かってばかりでなく、未

来に向かつても開かれたままだからだ。

そのような傷は、ひとつには、本書に戦後、一九五二年と六一年に加えられた「自註」の形で現れている。その(註四)には、こう書かれている。

こことだけ見ると、当時私が「日本文学報国会」に加わっていなかったように取れそうだし、事実またそう取った人があるが、そうではない。私はこの会を職業組合として認めたので、平会員として加入している。しかし、その会が主催した「大東亜文学者大会」には、(註二)の理由によって一度も参加しなかった。

(註二)には次のように記されている。

当時、中国の文学は、中共(中国共産党支配)地区のもの、(国民党政府の臨時首都)重慶地区のものと、日本軍占領下の諸都市の協力者文学とがあり、最後のものが日本の文壇で大々的にもはやされてきた。それは伝統と無縁であり、正統の文学でないと私は考えた。しかし、それを主張することは憚られたし、それを論証するだけ十分な自由中国の作品を手に入れることもできなかった。その鬱屈した気持を魯迅研究に託して、ここに吐いたのである。

そして、(註四)が付されている本文の箇所にはこう述べられている。

魯迅の文学は、現れとしてはいちじるしく政治的であり、彼が現代中国の代表的文学者である
と称されるのもその意味においてであるが、その政治性は、政治を拒否することによって与えら
れた政治性である。彼は「光復会」に加わらなかった（それは今日われわれが「日本文学報国会」
に加わらぬより重大なことである）。

（二三頁）

この作品に刻印された傷、あるいはむしろ、この作品がそこから生成したところの傷は、このよう
な、きわめて苛酷な、そして錯綜した政治的、歴史的文脈と不可分だった。若き竹内好は大本大政
翼賛会の下部組織「日本文学報国会」の会員だった。この組織の政治的主張、特に日本文学と中国文
学の関係の理解については、彼は、占領地区の対日協力文学が「伝統と無縁であり、正統の文学でな
い」という理由で不同意だった。しかし、弾圧を恐れてそのことを公言はせず、文学報国会の存在を
「職業組合」として認知していた。

本書はそのようなポジションにいた研究者の筆のもとに生まれた。そしてその研究者は、みずから
の現在の立場との対比から、魯迅の政治的選択の意味を推しはかった。光復会とは一九〇四年、浙江
省出身の人々によって結成された清王朝打倒を目標とする革命的政治結社である。現在の研究では魯
迅が光復会会員だったことは定説だが、竹内はここで反対の仮説に立って、魯迅のその選択を、一九
四三年の日本の文学者が文学報国会に入らないことよりも「重要」、言い換えれば、いっそう厳しく
深い覚悟を必要とする举措だったと断定するのである。それが、「それは今日われわれが「日本文学

報国会」に加わらぬより重大なことである」という文章の意味である。

革命結社に加わらないことが、ファシスト文化団体に加わらないこと以上に深い思想的表現である
とはどういうことか。「政治を拒否すること与えられる政治性」とは何か。こうして私たちは、本
書の核心的主張の入り口に立つ。この主張は後に、五〇年代以後の日本の文学「政治思想に、ある形
で大きな影響を与えることになった。

文学は無力である。魯迅はそう見る。無力というのは、政治に対して無力なのである。それは、
裏から云えば、政治に対して有力なものは文学ではない、ということである。これは文化主義だ
ろうか。確かにそうである。魯迅は文化主義者である。しかし、この文化主義は、文化主義に対
立する文化主義である。「文学文学と騒ぐ」こと、文学が「偉大な力を持つ」と信ずること、そ
れを彼は否定したのである。文学が政治と無関係だと云おうとするのではない。関係のないとこ
ろには、有力も無力も生ずるはずがないからである。政治に対して文学が無力なのは、文学がみ
ずから政治を疎外することによって、政治との対決を通じてそうなるのである。政治に遊離した
ものは、文学でない。政治において自己の影を見、その影を破却することによって、云いかえれ
ば無力を自覚することによって、文学は文学となるのである。（中略）政治と文学の関係は、従
属関係や、相剋関係ではない。政治に迎合し、あるいは政治を白眼視するものは、文学ではない。
真の文学とは、政治において自己の影を破却することである。いわば政治と文学の関係は、矛盾
的自己同一（註二二）の関係である。（中略）文学の生まれる根元の場は、常に政治に取巻かれて

いなければならぬ。それは、文学の花を咲かせるための奇烈な自然条件である。ひよわな花は育たぬが、秀勁な花は長い生命を得る。私はそれを、現代中国文学と、魯迅とに見る。

(二七四—二七五頁)

竹内好の世代は、その学生時代に、日本のプロレタリア文学が、権力の弾圧によって、また、この運動に加わった作家たちの多かれ少なかれ内発的な思想的変質によって、一気に崩壊していく様を目の当たりにした。「私はそれを、現代中国文学と、魯迅とに見る」という一文は、現代日本文学と日本の作家たちには見られなかったものを現代中国文学と魯迅に見るということである。「ひよわな花」という表現は、前者の文学と作家たちを暗示している。

「文学は無力である」とは、若き竹内好が、日々反芻し、噛みしめていた命題だったに違いない。この命題が意味しているかにもえる単なる諦念を突き抜けて、その彼岸にあるはずのものに迫りたい——彼の思想上の格闘と中国研究は、このような欲求のうちで一つに溶け合っていただろう。そのなにものかを言い当てようとする彼の努力は、しかし、そのための言葉が自分には欠けているという認識に、絶えず差し戻されていたように思われる。かくして、本書の核心的主張は、ある種の哲学言語を取り込むことなくしては言表されえなかった。

「政治において自己の影を見、その影を破却することによって、云いかえれば無力を自覚することによって、文学は文学となるのである」。「真の文学とは、政治において自己の影を破却することである。いわば政治と文学の関係は、矛盾的自己同一の関係である」。先の引用中に二度現れるこのほぼ

同趣旨の表現には、西田幾太郎の著作からの明白な影響の跡がある。「矛盾的自己同一」はもちろん「無力を自覚する」という言い方にも、西田的な行爲的直観としての「自覚」の思想の反響がある。(註一二)で戦後の竹内は、「(本書には)この種の西田哲学から借りた用語が散在するが、これは当時の読書傾向からの影響であって、今日から見れば思想的な貧しさのあらわれである。西田哲学における用語例に厳密に従っているわけではない」と述べている。この回顧の言葉は、例えば一九四八年の「中国の近代と日本の近代」で、日本の近代文化の欠陥を「古いものを捨てて新しいものを取り入れる」のに急なその思想的体質に求め、その例として西田哲学も、ある時代の「新しいもの」のうちに数え入れられている(「唯物弁証法がダメなら絶対矛盾的自己同一」)ことと符合する。

しかし、私は、今回読み直してみても、この種の哲学用語が、本書から、その核心的主張を損なうことなくすっきり引き去ることができるとは思えなかった。「絶対矛盾的自己同一」や「自覚」や「場所」の論理は、その程度には、若き竹内好の思考を規定していたのであり、これらの論理に対する依拠の水準は、単なる借用の域を超えているように思われる。

しかし同時に、先の引用箇所でも、これらの概念語が、つねに、「云いかえれば」「いわば」といった言葉に続いて導入されていることは、本書のテキストのなかに、ある種の断層が潜んでいることも示唆している。あらゆるテキストと同様、本書のテキストも、複数のテキストから織り上げられている。そのテキストとテキストの間に、このテキストならではの特別な翻訳の運動がある。

「政治において自己の影を見、その影を破却することによって、云いかえれば無力を自覚することによって、文学は文学になるのである」。この一文には、きわめて強い目的論的なドライブがかかっ

ている。「文学が文学になる」というテロスを目指して、ただ一文のなかで、いくつもの飛躍が行われる。というのも、「政治において自己の影を見る」というこの文の冒頭で喚起される経験は、「その影を破却する」という決断を、必然的に生み出すわけではないからだ。そして、「影を破却する」ところが、多少とも暴力的な翻訳によって、「無力を自覚する」とこと等置されるためには、その決断の主体は、おのれの「無力」を、すでになんらかの形で知ってはいなくてはならないはずだからだ。すなわち、「自覚」以前の「知」を、あらかじめ持っていないとはならないはずだからだ。逆に言えば、「政治において自己の影を見る」という経験のうちで、要するに、すべてはすでに起きているはずなのである。

本書の言葉のうちで、西田哲学に限らず、あらゆる哲学的概念や論理にもっとも執拗に抵抗するもの、それらを否応なく惹きつけながら、それらによってけっして翻訳されるがままにならないもの、それはおそらく、「影」という言葉だろう。本書でこの言葉は、きわめて多様な意味で使われている。ほとんど正反対の意味さえ帯びることがある。それでいて、それらの用法の間には、明らかにある磁場が形成されている。

彼（魯迅）の文章を読むと、きまってる影のようなものにぶつかる。その影は、いつも同じ場所にある。影そのものは存在しないのだが、光がそこから生まれ、そこへ消え入り、そのことによって存在を暗示させるようなある一点の暗黒がある。うかつに読み過こせば気づかずに済ませるが、一度気がつくとなんか忘れてられない。華やかな舞踏場に醜態が踊っているように、

しまいには醜態の方が実体に見える。魯迅は、そのような影を負って一生を過ごした。私が彼を贖罪の文学と呼ぶのは、その意味である。そして、彼が罪の自覚を得た時機は、彼の伝記におけるこの不明な時期（一九一八年の『狂人日記』発表に先立つ六年間の北京在任期）を措いて他にないように思われる。

（五九頁）

この「影」はまず、読者であり翻訳者でもある竹内の心の「眼」に映る。それは「いつも同じ場所にある」。それ自体存在ではないが、あらゆる存在、あらゆる光がそこから生じそこに消え去る暗黒であり深淵である。だが、そのような「影」を、暗黒を、深淵を、魯迅は眼前に見据えているのではない。竹内の心の「眼」に映る魯迅は、「影」を追う人ではなく、「影を負う」人である。「影」を、暗黒を、見えないものを「負う」魯迅を竹内は「見る」。

そこからただちに、「贖罪の文学」という規定が引き出される。先には「影」がその「破却」において「無力の自覚」を生み出したように、ここでは「影」は「贖罪の自覚」の隠喩となる。「影」とはある負債であり、おそらくは無限の負債のように背負われるものだ。「影」の揺曳を、一つの強力な解釈が取り押さえようとする瞬間。私たちはここで、竹内が「罪」という言葉で示唆しているものを吟味してみなければならぬ。

「序章——死と生について」で、竹内は早くもこの「贖罪」というモチーフを焦点化している。魯迅の死という出来事の特異性を言い表そうとしていくつもの補助線が引かれていくなかで、一つの方角は、すでにあらかじめ選び取られてもいる印象を受ける。

(……) 当面の私の目標は、思想家としての魯迅でなく、文学者としての魯迅である。私は、魯迅の文学にある本源的な自覚、適当な言葉が欠くが強いて云えば、宗教的な罪の意識に近いものの上に置くとうとする立場に立っている。魯迅にはたしかに、そのような止みがたいものがあつたことを私は感ずる。(……) 魯迅は、自分を殉教者に考えたことはなく、むしろそう見られることを嫌悪している。彼は先覚者でなかつたように、殉教者でもなかつた。しかし、その現れ方は、私には殉教者的に見える。魯迅の根柢にあるものは、ある何者かに対する贖罪の気持でなかつたかと私は想像する。何者かに対してであるかは、魯迅もはっきりとは意識しなかつたろう。ただ彼は、深夜に時として、その何者かの影と対峙しただけである(散文詩集「野草」その他)。それがメフィストでなかつたことは確かである。中国語の「鬼」は、それに近いかもしれぬ。あるいは更に、周作人の云う「東洋人の悲哀」という語を、ここに註釈として援用することは註釈である限り、差支えない。

(一一一—一二頁。竹内による強調)

散文詩集『野草』には「影の告別」という一編がある。そこでは人の睡眠中に本体に別れを告げる「影」が一人称で語る。「影」は「明暗の境をさまよう」ことをきらい、いっそ「暗黒に沈むほうがよい」と言う。このような言葉に、竹内は、魯迅の内なる、ある自己処断のつぶやきを聞き取っていたのだと思う。魯迅における「影」を「贖罪の自覚」に結びつける根柢は、たぶんこのあたりにある。しかし、私はこの散文詩に、むしろニーチェの「漂泊者とその影」や『ツァラトゥストラ』のいくつ

かの断章との近さを感じる。この角度からは、「贖罪の自覚」とはまた別の、もう一つの分身の経験が魯迅のうちに求められることになるだろう。言うまでもなく、そのような意識からの解放が、ニーチェの思想のとりわけ強力なモチーフだからだ。とはいえ、私はこの二つの読みがたがいには排除するものだと考えない。ここにあるのは竹内好の「翻訳者」としてのためらい、いくつもの翻訳可能性(メフィスト、中国語の「鬼」、「東洋人の悲哀」の間でのためらいと、「文学者」たらんとする彼の決断的解釈の間の、言い換えれば、「破却」不可能な影に魅惑されたままの心の「眼」と、その正体を一義的に決定して「破却」しようとする「手」の意志の間の、微妙な関係であると言っている。本書の魯迅像の、デッサンとしての美しさは、おそらく、このためらいと決断の、拮抗する強度に由来している。

ところで、竹内好は翻訳者である。事実在即して言えば、この命題には疑問の余地がない。魯迅の作品ばかりでなく、他の少なからぬ中国語の文献をも、竹内は翻訳した。だが、私たちの意識のなかには、竹内好を翻訳者と考えることに對する強い違和感がある。彼は単なる翻訳者ではない、彼の仕事は翻訳を超えていた、翻訳は魯迅についての彼の仕事の一部であり、その真髓は翻訳以外の、彼自身の魯迅研究のうちにこそ表現されている——竹内好の思想的遺産に関心を寄せる多くの人が、言わずもがなに、そう考えているのではないだろうか。

一方、魯迅も翻訳者である。この命題にも、事実在即して言えば、疑問の余地はない。ロシア、東欧、バルカン諸國の、また日本の作家たちの作品を、だがまた、ニーチェの『ツァラトゥストラ』の序文をも、魯迅は翻訳した。彼は一生翻訳し続けた。著作とはほぼ同量の翻訳作品を遺した。翻訳を論

じ、擁護する評論も書いた。死の前年、五五歳で、彼はゴーゴリの『死せる魂』の翻訳を始めている。このような翻訳者としての魯迅を、竹内好はどう考えていたのだろうか。先に触れた政治と文学の弁証法と深くかわりながら、彼の魯迅像は二つの極の間で形成される。「文学者」魯迅と「啓蒙者」魯迅の間である。それでは、この二つの極の間で、「翻訳者」魯迅はどこに位置づけられていたのだろうか。翻って、彼自身の魯迅作品の翻訳作業はどのよりに捉え返され、どのように「自覚」されていたのだろうか。

ここで私たちは、魯迅にとっても、また竹内にとっても、翻訳が単なる技術の問題、中立的な作業、罪のない営みではありえなかった事実を想起しなくてはならない。それは本書で竹内が、魯迅の思想形成に「何かの意味で翳りを与えていそうに思われるもの」六つのうちの二つに数えた清末民初の大思想家章炳麟が、かつて激烈な言葉で指弾した事柄にかかわっている。

今の人の道徳はおおむね職業によって変る。職業を総計すると一六種類の人がいる。第一が農人、第二が工人（手工業者）、第三が裨販（行商）、第四が坐賣（店を持つ商人）、第五が学究（むらの先生）、第六が芸士（芸術家）、第七が通人（学問に通じた人）、第八が行伍（兵隊）、第九が胥徒（下級役人）、第一〇が幕客（高官の顧問）、第一一が職商（権力に直結した御用商人）、第一二が京朝官（中央の高官）、第一三が方面官（地方の高官）、第一四が軍官（高級軍人）、第一五が差除官、第一六が雇訳人（通訳）である。職業は全部で一六等であり、その道徳の程度も一六等である。画一的にいうのではないが、概略を得ることはできる。

〔革命の道徳〕、一九〇六年、『章炳麟集』、西順蔵・近藤邦康訳、岩波文庫

「雇訳人」は章炳麟にとって、道徳的に最低の職業、総督と「起居を共にし、できもののうみを吸い痔をなめることを、天職のごとくやっていた」地方の下級官吏「差除官」以下の存在だった。彼は吐き捨てるように言う。「しかしその（差除官の）次にまだ雇訳人がおり、白人のたいこもちにさえなっている。単に督撫（総督と巡撫）によりかかっているだけではない」。このように規定された通訳の道徳的地位から翻訳者のそれがさほど遠くないことは、「知識が進む程、権力・地位が上昇する程道徳からますます遠く離れる」と続けて言われているところからもうかがえる。

翻訳者は民族内部の権力に寄生する者よりたちの悪い民族の裏切り者だ。一言で言えばそういうこととなる。魯迅が翻訳を始めたのは、このような弾劾が切実な意味を持つ歴史的、文化的緊張の中であつた。東京小石川で彼が章炳麟の国学講義を聴講した一九〇八年は、弟周作人と共同で『域外小説集』を出版した年の前年に当たる。一方竹内が、翻訳に対するこのような道徳的弾劾に人一倍敏感だったことは、彼の生涯の全言行、とりわけ戦後、先にも挙げた「中国の近代と日本の近代」などで彼が展開した輸入文化批判からも明らかだろう。

本書には竹内が、翻訳を主題化することはしないまま、魯迅における翻訳の動機を問題にしている箇所がある。医学から文学への転換、『域外小説集』出版の経緯、そして梁啓超の思想、とりわけその政治小説論からの魯迅の訣別について、周作人の証言、さらには魯迅自身の述懐にまで彼が留保をつけるところである。梁啓超と魯迅の隔たりを最大限にみつめること、それは啓蒙と文学を、そして

まず翻訳を、はっきり切断することを意味する。

ともかく、魯迅と梁啓超との間には、決定的な対立があり、その対立は魯迅そのものの内面的矛盾を対象化したとも考えられるもので、従って魯迅が梁啓超の影響を受けたと云うより、魯迅は梁啓超において対象化された自己の矛盾を見たというような関係ではなかったかと私は考える。それは、云い換えれば、政治と文学の対立とも云うべき関係である。魯迅が梁啓超の影響を受け、のちにそれを脱したということは、彼が梁啓超において自己の影を破却し、自己を洗ったという意味に解すべきではないかと私は思う。そのことは、彼がその後、章炳麟と、ニイチェと、弱小民族の文学を選択したことによって証明されるのではないだろうか。

(八九頁)

文学は、翻訳もまた、啓蒙ではない。啓蒙であってはならない。啓蒙であるかぎり、それらは章炳麟の批判の圏内に落下する。一般に流布している、すなわちそれ自体西洋から翻訳され輸入された啓蒙の概念、その運動とは隔絶した文学がひとたび成立してはじめて、ようやく其の啓蒙は可能になる。「文学者魯迅が啓蒙者魯迅を無限に生み出す窮極の場所」、それが本書が採り当てようと目指した地点であるとすれば、この切断作業の重要性はおのずから理解されるだろう。

しかし、梁啓超の政治小説論を否定し非政治的素材を文学の主題に選ぶことによって魯迅が文学を啓蒙から切断したという説明は、今日の読者にとって、おそらくはあまりに理解しやさいのではないだろうか。逆に言えば、魯迅自身が直面していた困難の大きさは、それだけ想像しにくいのではない

だろうか。それに対し、翻訳を啓蒙から切断することは、当時も今も、思考することも実践することも、より難しいように思われる。中国の近代にとっても、日本の近代にとっても、社会から、国家からの翻訳の要求は、国民国家形成と軌を一にした翻訳への欲望は、西洋起源の啓蒙の運動と不可分だった。その事情は今なおさして変わっていない。だからこそ、私たちは、本書を読むとき、同時に次の問いを立てなくてはならない。本質的に反啓蒙的な、啓蒙の力に抗うような翻訳とはどのようなものか。翻訳の歴史的实践のうちに、啓蒙の運動とは別の、より古く、より広いある層を、いかに掘り当てるべきか。将来そのような翻訳が到来する条件を、今、どのように準備するべきか。

あるいは、そのような翻訳は、本書のなかで、おそらくすでに到来していたのではないか。そんなことを、この「記念碑」的作品の傷のひとつに触れるとき、私はふと夢見るのである。(註一)にはこう書かれている。「掙扎 *struggle* という中国語は、がまんする、堪える、もがくなどの意味を持つている。魯迅精神を解く手がかりとして重要だと思うので、原語のまま、しばしば引用してある。強いて日本語に訳せば今日の用語法で「抵抗」というのに近い」。

「抵抗」という言葉が、この言葉をめぐる思考、そして実践が、竹内において、つねにすでに翻訳の運動のうちにあったことを、ここから私たちは知ることができる。本書で竹内が抱えた課題とは、他者の抵抗を、「抵抗」という言葉さえ正しい翻訳であるかどうかかわからないその姿を、いかに翻訳すべきか、ということだったのではないか。そして、そのとき翻訳は、狭い意味での言語にも、作品にも、個人の思想にもはや限定されない、異なる民族の、二つの集団的、歴史的経験の間の翻訳であるほかにないものに変化する。それは不可能な出来事であり、翻訳者にとっては不可能な任務だろう。

それが抑圧民族と被抑圧民族の間の翻訳である場合にはいっそう不可能だろう。そのような任務を担ったとき、翻訳者の意識は、本書で魯迅に即して竹内好が「贖罪の自覚」と呼んだものにかなり近いものになるだろう。しかし、そのような翻訳だけが章炳麟の批判に堪えうると、魯迅も、竹内も、考えていただろう。

そしてこのような翻訳は、まず翻訳者自身が、あらゆる啓蒙の運動の彼方で、先進的なもの、強力なものに対する摂取、我有化、同一化、同化の欲望の彼方で、他者によって翻訳されるがままになるような、自分が、自分の経験が翻訳されるのを、自分がその他者の「影」であるのを「見る」ようなときにしか起こらない。しかし、そのとき、どんな心身の動揺が、情動が、地震のように存在を襲うものか、そのような情動がいかに時間を超えておのれを伝えるものか、それを、本書の読者はきつと感じ取られるに違いない。

〔竹内好〕「新版」魯迅、未來社、二〇〇二年、解説

歴史を書きかえるということ 竹内好「中国の近代と日本の近代」

言うまでもないが、「歴史の書きかえ」という表現は、これまでもけっして一義的に用いられてきたわけではない。この表現は、原義に解せば、歴史家の作業のほぼすべてを指すだろう。「ほぼすべて」とは、つまり、公認の歴史の反復に甘んじることなく過去についての新たな解釈を提出しようとする多少とも独創的な歴史家の作業のすべてということである。しかし、この表現は、ある出来事が、それ自体として、それ以前の歴史の根本的な見直しを強いるほどの影響を後世に及ぼすような事態を意味する場合もある。時間の流れに断絶を刻むそのような出来事も、厳密にいえばエクリチュールの作用を媒介することなく生起することはありえないが、言葉の用法としては、これを原義と区別することにさして不都合はないだろう。だが、さらに、このような出来事が、ただひとりの人物の出現と等価でありうるとする立場もある。ひとりの人が存在したということがそのまま「歴史の書きかえ」を意味するというような発想は、特に今日では、ある種の反発を引き起こさずにいない。しかし、近年、欧米や日本で問題となっている「歴史修正主義」的な「歴史の書きかえ」、文書の操作と証言の否認によってあったことをなかったと言いくるめようとする哀れなほど姑息な「歴史の書きかえ」